

## 「成城国文学」

<b>【第42号】</b>	<b>2026年3月 発行</b>
後藤 昭雄	『日本詩紀』詩人名正誤 —併せて『本朝一人一首』の過誤—追補
小島 孝之	田中親美透写古筆切「名葉集」の研究(5)
成田 大知	紀州家本源氏物語本文筭記 —若菜上巻～幻巻—
北原 渚	《研究レポート》 新聞小説「居候勿々」を読む
工藤 力男	《エッセイ》 古語のふみあと
<b>【第41号】</b>	<b>2025年3月 発行</b>
後藤 昭雄	作文における朗詠
成田 大知	読書の行為としての書写 ——紀州家旧蔵伝阿仏尼等筆源氏物語からの考察——
小島 孝之	田中親美透写古筆切「名葉集」の研究(4)
野澤 拓真	平山行蔵の政治論 ——赤穂事件を中心に——
若井 健	北杜夫と世田谷 ——「駿馬」にみる羽根木公園——
西村 準吉	亀井孝と国語入試問題(下)
松井 和泉	《エッセイ》 川上弘美『月火水木金土日』 ——6時間目の試み——
<b>【第40号】</b>	<b>2024年3月 発行</b>
工藤 力男	上代日本語連濁論のアポリア
後藤 昭雄	寛治五年曲水宴詩本文補訂——『中右記部類紙背漢詩』九条家本断簡を資料として
小島 孝之	田中親美透写古筆切「名葉集」の研究(3)——前稿の訂正及び追稿——
市村 栄理	細見綾子の俳句形成期——平等な人間観の由来——
正木 好弘	音韻と字映
<b>【第39号】</b>	<b>2023年3月 発行</b>
佐藤 道生	『本朝麗藻』所収の釈奠詩——句題詩の変型として
蔣 義喬	嵯峨朝の梵門詩と中唐初期の江南詩壇
後藤 昭雄	『本朝文粹』の文人——上位入集者とその作品
磯部 祥子・小林 真由美・山田 尚子	『本朝文粹』巻第十三の研究・続 ——知識文一篇・願文二篇の注釈——
小島 孝之	田中親美透写古筆切「名葉集」の研究(2)
藍木 大地	佐々木邦「トム君サム君」を読む
若井 健	北杜夫作品における音楽——『牧神の午後』『幽霊』を中心に——
西村 準吉	亀井孝と国語入試問題(上)

小原 茉莉	《研究レポート》大伴家持「挽歌一首」のうつそみ・うつせみ—『萬葉集』卷第十九、四二—四番—
工藤 力男	《エッセイ》幸田文、前期作品の言語景観・続
<b>【第38号】</b>	<b>2022年3月 発行</b>
小林 真由美	『東大寺諷誦文稿』の文体について —附・「東大寺諷誦文稿」段落一覧—
蔣 義喬	詠物と言志 —菅原道真を中心として—
後藤 昭雄	『扶桑集』の詩人(六)
成田 大知	山岸徳平所引源氏物語本文の問題
小島 孝之	田中親美透写古筆切「名葉集」の研究(1)
大村 慧	「春は馬車に乗って」論 —転換点としての「医者」の宣告—
正木 好弘	文字の音韻に該当する術語は何か
上野 英二	《研究レポート》古今和歌集の巻頭歌(続) —万葉集から続万葉集へ—
工藤 力男	《エッセイ》幸田文、前期作品の言語景観 —序説と語彙集成—
<b>【第37号】</b>	<b>2021年3月 発行</b>
後藤 昭雄	『扶桑集』の詩人(三)
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(十三) —入札目録の写真から—
正木 好弘	「字体」考
成田 大知	東洋大学附属図書館蔵「はゞき木」私見 —紀州家旧蔵伝阿仏尼等筆源氏物語の研究—
磯部 祥子 小林 真由美	〈共同研究報告〉古代和歌集の受容史的研究
小林 真由美	成城大学本萬葉集について —活字附訓本を底本とする平仮名傍訓本萬葉集—
磯部 祥子	『古今和歌集目録』校本稿(第一部・作者歌数)
後藤 昭雄	《研究レポート》白居易「諭友詩」の本文
上野 英二	《研究レポート》仮名成立の意義 覚書 —言葉の獲得—
工藤 力男	《エッセイ》外国語音の仮名表記
<b>【第36号】</b>	<b>2020年3月 発行</b>
藤井 淑禎	原口のモデル橋口五葉の〈言行一致〉 —独身者問題小説としての『三四郎』
後藤 昭雄	『扶桑集』の詩人(二)
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(十二) —入札目録の写真から—
伊澤 正俊	『古事記』テキスト—試論 —スサノヲと魂振り—
小林 真由美	文化庁所蔵『開元釈教録』卷第十八残巻について
賀川 歩美	「槿」の和と漢
	《追悼 朽尾 武先生》

<b>【第35号】</b>		<b>2019年3月 発行</b>
山田 直巳	雲南白族の「踏喪歌」と日本「踏歌」 ——映像を介して、その源流を探る——	
後藤 昭雄	『扶桑集』の詩人(一)	
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(十一) ——入札目録の写真から——	
成田 大知	「白露に風の吹きしく秋の野」の情景 ——文屋朝康・後撰集三〇八番歌について——	
十河 由樹	佐藤直方講「拘幽操辨」再考	
藍木 大地	『苦心の学友』を読む ——〈変化〉の視点から——	
磯部 祥子・小林 真由美・山田 尚子	『本朝文粹』巻第十三の研究 ——表白文一篇・願文二篇の注釈——	
賀川 歩美	「女郎花」の和と漢	
山田 尚子	貴重書室から② 亀井孝旧蔵古活字版コレクションより〈その2〉	
<b>【第34号】</b>		<b>2018年3月 発行</b>
後藤 昭雄	《講演記録》菅原是善の願文と王勃の文章	
小林 真由美	《論文》『善悪因果経』管見—『東大寺諷誦文稿』『日本靈異記』『平家物語』など—	
廣川 達也	素性法師の「なでしこ」の歌—古今集二四四番歌について—	
成田 大知	物語の現実感—源氏物語の世界構築について—	
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(十)—入札目録の写真から—	
山田 尚子	貴重書室から① 亀井孝旧蔵古活字版コレクションより〈その1〉	
<b>【第33号】</b>		<b>2017年3月 発行</b>
柘尾 武	《講演記録》『山海経』における神鳥鳳凰 ——異鳥なれど異鳥にあらず——	
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(九) ——入札目録の写真から——	
北條 加奈	〈研究レポート〉比蘇寺縁起考 ——仏像の用材の問題を中心に——	
上野 英二	〈研究レポート〉古今和歌集の巻頭歌 ——去年とや言はむ今年とや言はむ——	
小林 加奈	〈研究レポート〉『心学早染草』の「理屈」	
南 明希	〈研究レポート〉『搜神記』における龍 ——古巢老姥譚をめぐって——	
村上 碧 竹内史郎	日本語ローマ字表記における外国人への「配慮」について ——YEN・TOKIO・NIPPON——	
<b>【第32号】</b>		<b>2015年3月 発行</b>
後藤 昭雄	嵯峨朝における新樂府受容をめぐって	
清水 由美子	四類本『保元物語』の時代認識—冒頭のこぼれ「中比」をめぐって—	
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(八)—入札目録の写真から—	
新永 悠人	北琉球奄美大島湯湾方言の複数または例示を表すkjaとnkjaの形式的分析	
<b>【第31号】</b>		<b>2015年3月 発行</b>
山田 尚子	司馬相如伝の受容と展開	
小島 孝之	古筆切拾塵抄・余話 —「宮本切」という古筆切について—	

系井 久	《研究レポート》 「女はらから」と「ほい(本意)にはあらで」の解釈をめぐって —『源氏物語』より『伊勢物語』を照らして—
藍木 大地	『笑の王国』拾遺 —佐々木邦研究ノート2—
<b>【第30号】</b>	<b>2014年3月 発行</b>
今西 祐一郎	通俗と啓蒙 —江戸時代出版史一斑—
山田 直巳	古代和歌の「ふるまい」 —その歌舞／音曲／儀礼—(上)
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(七) —入札目録の写真から—
荒井 裕樹	〈狂気〉の語り方 —樋口一葉「うつせみ」論
鳥居 千恵	中里恒子 小説「乗合馬車」論 —日本近代文学史上初の女流芥川賞作家と横光利一—
藍木 大地	《研究レポート》 佐々木邦研究ノート —『笑の王国』の諸短篇より—
<b>【第29号】</b>	<b>2013年3月 発行</b>
後藤 昭雄	「納和歌集等於平等院経蔵記」私注
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(六) —入札目録の写真から—
佐々木 孝浩	室町期東国武士が書写した八代集 —韓国国立中央図書館蔵・雲岑筆『古今和歌集』をめぐって—
真島 望	近世地方地誌の生成と伝播 —鈴木秋峰『豆州熱海地志』を例として—
鳥居 千恵	横光利一「 <sup>ピンク</sup> 秘色」論 —作品の人物と伊勢詣の舞台設定を視座として—
大谷 千晶	坂口安吾「蟬」私解
横田 彩花	伊藤里和著『夢想の深遠 夢野久作論』
<b>【第28号】</b>	<b>2012年3月 発行</b>
井上 健	大正作家の翻訳しようとしたものは何か —谷崎潤一郎、佐藤春夫を中心に—
長塚 祐季	刀剣の文学史 —古代・中古を中心に—
藤井 由紀子	「昔物語」孝 —『源氏物語』の表現手法—
後藤 昭雄	延久三年「勸学会記」本文再考
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(五) —入札目録の写真から—
横田 彩花	谷崎潤一郎「孝」の教えをめぐって —「不幸な母の話」孝—
水島 佑	梶井基次郎「Kの昇天(或はKの溺死)」 —「私」の二重性について—
工藤 力男	字音接辞〈化〉の論
朽尾 武	小島憲之「上代日本文学と中国文学」上における類書の研究
<b>【第27号】</b>	<b>2011年3月 発行</b>
竹内 史郎	ツツアルの歴史的展開 —文体差に着目して—
妹尾 昌典	『土佐日記』解釈の諸問題
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(四) —入札目録の写真から—
本間 正幸	「唐苜」考 —『冬の日』における野水の句をめぐって—
荒井 裕樹	焦土の中の「人間」 —田村泰次郎「肉体の門」覚え書—

田澤 一穂	木から見る寺社縁起の一考察
佐佐木 定綱	なめとこ山の熊 -三つの世界と小十郎-
<b>【第26号】</b>	<b>2010年3月 発行</b>
小泉 浩一郎	谷崎文学の思想 -『痴人の愛』を中心に-
土井 知子	『拾遺百番歌合』の伝本について
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(三) -入札目録の写真から-
安田 吉人	立羽不角年譜稿(終)
吉野 由衣子	荒木田麗女『怪世談』典拠再考 -「秋の霜」と「朝雲」と
揖斐 高	『五山堂詩話』巻七「増補版」のことなど
後藤 昭雄	『和漢兼作集』下巻の基礎的考察
<b>【第25号】</b>	<b>2009年3月 発行</b>
小島 孝之 土井 知子	成城大学本「拾遺百番歌合」翻刻
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(二) -入札目録の写真から-
根木 優	駒澤大学図書館所蔵『仏乗禪師東帰集』(書入れ本) -翻刻と解説-
真島 望	近世説話の生成一斑 -菊岡沾涼『諸国里人談』・『本朝俗諺志』と地誌-
工藤 力男	史学と語学のあいだ -壬生をめぐる-
上野 英二	ことばの深みへ -佐竹昭広先生の学問-
工藤 力男	佐竹昭広「音と光-「玉響」解説の方法-」 『国語国文』第廿二巻八号(昭和廿八年八月)
<b>【第24号】</b>	<b>2008年3月 発行</b>
後藤 昭雄	坤元録屏風詩をめぐる
木村 高子	安積山歌詠考 -山の井、などさしも浅きためしになりはじめけん-
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(一) -入札目録の写真から-
真島 望	菊岡沾涼の絵入俳書
工藤 力男	引用と段落をめぐる閑話
中野 三敏	江戸文化再考 -そして近代の成熟-
<b>【第23号】</b>	<b>2007年3月 発行</b>
小島 孝之	民間伝承における土地の創生と神をめぐる
宮脇 真理子	臼井六郎復讐譚について -『冬楓月夕栄』刊前刊後-
宮山 昌治	中国におけるベルクソン哲学の初期受容 -『民鐸雑誌』柏格森號を中心に-
工藤 力男	格支配から読む人麻呂歌集旋頭歌 -手力つとめ織れるころもぞ-
武部 健一	『山海経』研究の歴史とその現代的意義
山田 俊雄	日本人が日本語を書きあらわす普通の方法
YAMADA Toshio	PRESENTATION DU SYSTEME D'ECRITURE JAPONAIS (COMMENT LES JAPONAIS ECRIVENT-ILS LEUR LANGUE)
畠山 有紀子	日本語とリズム -現代における韻律-
<b>【第22号】</b>	<b>2006年3月 発行</b>
上野 英二	みよしのゝたのむのかりも -「狩と恋」拾穂-
工藤 力男	格助詞の射程 -後見むと君が結べる-

朽尾 武	橋本関雪『南船集』小考 －山田俊雄先生を偲ぶ－
妹尾 昌典	戎昱<<早梅>>詩と李羣玉<<寄友>>詩
武部 健一	『山海経』の意味するもの －郭郭『山海経注証』の自序に見る、本質とその意義－
<b>【第21号】</b>	<b>2005年3月 発行</b>
小倉 脩三	蓮田善明と三島由紀夫 －小説「有心」を中心に－
岡崎 真紀子	説話の展開と歌学 －『俊頼髓脳』における「芹摘みし」説話をめぐって－
加藤 三重子	山田詠美「ひよこの眼」のパースペクティブ －〈学級〉に取り込まれたテキストの法則－
宮脇 真理子	伊東橋塘の講談落語本 －速記本出現前後－
工藤 力男	複合動詞論序説 －とれたて・生まれたて－
妹尾 昌典	宮崎修多校注『恕軒文鈔』『恕軒遺稿』
安元 隆子	近藤典彦著『『一握の砂』の研究』
安部 久美	影山恒男著『立原道造と山崎栄治 困難な時代の蜜房』
<b>【第20号】</b>	<b>2004年3月 発行</b>
近藤 典彦	『一握の砂』巻頭歌考
真島 望	菊岡沾涼の俳諧活動
生方 智子	『はやり唄』における描写の欲望
池上 玲子	正統ゆえの異端 －『行人』論
角田 香苗	『行人』の地政学
朽尾 武	滇金絲猴を求めて －雲南の旅－
青柳 恵介	教育研究所にて保管している「小林秀雄文庫」について
宮山 昌治	「感想」とメルロ＝ポンティ －小林秀雄の蔵書から－
妹尾 昌典	『中華若木詩抄』の若干の問題について
西村 亜希子	『日本靈異記』と『冥報記』の冥界
工藤 力男	愉楽と警世の書 －山田俊雄著『日本のことばと古辞書』を読む
<b>【第19号】</b>	<b>2003年3月 発行</b>
前田 雅之	三国／本朝・公／私・今昔物語集 －中古・中世における世界＝日本認識と公共性をめぐって－
渡辺 真優佳	鶯のこぼれる涙いまやとくらむ －『古今集』『二条後の春の初めの御歌』考－
本間 正幸	『別座鋪』の笑い －蕉門における「笑い」の変遷の中で－
工藤 力男	日本語練習帳・続貂
<b>【第18号】</b>	<b>2002年3月 発行</b>
山田 俊雄	『兵員要語帖』といふ資料
星野 貴志	景清論 －『平家物語』諸本が形成する景清像の考察－
中野 真麻理	梟山伏攷
小林 千草	仮名草子『伊曾保物語』の寓話と中世史実 －織田信長と「御袋様」との母子関係
蔵本 博史	受容の差異 －『無惨』と「探偵叢話」－
阿部 高裕	メディアとしての言語／苦悩としての言語 －『行人』の今日性－
加藤 三重子	志賀直哉『灰色の月』のポリティクス
根木 優	『和漢朗詠集』巻下、竹、四百三十三番について
西崎 美登利	「高等遊民」であること －『彼岸過迄』論－

朽尾 武	『怪奇鳥獣圖巻』(工作舎刊)を読む
<b>【第17号】</b>	<b>2001年3月 発行</b>
生方 智子	心理を描写する —『蒲団』における観察の技法—
宮山 昌治	「修養」の系譜 —自然主義前後の思想状況—
毛利 恵	終わりなき非日常 —『秘密』論
清野 寛	幻滅される故郷 —安部公房『けものたちは故郷をめざす』論
青島 千恵	「あひゞき」と人情本
角田 香苗	青年たちのルールブック
奥田 勲	『西行・芭蕉の詩学』を読む
藤井 貞和	『平家物語の歴史と芸能』ノート
<b>【第16号】</b>	<b>2000年3月 発行</b>
上野 英二	狩と恋 —伊勢物語ノート—
林 圭介	<知>の神話 —夏目漱石『それから』論—
吉田 志穂	物語としての地図 —田山花袋『蒲団』論—
蔵本 博史	探偵小説の成立へ
小野 亮	道化師の誘惑 —コミュニケーション・モデルとしての『道化の華』—
根木 優	『三国志演義』における格言について
妹尾 昌典	漢文雑記
紅野 謙介	大川公一著『竹林の隠者 —富士正晴の生涯—』
乾 善彦	工藤力男著『日本語史の諸相 —工藤力男論考選—』
木股 知史	石原千秋著『漱石の記号学』
<b>【第15号】</b>	<b>1999年3月 発行</b>
工藤 力男	現代表記の論理と美学
宮山 昌治	有島武郎とベルクソン受容 —神を語ること／語らないこと—
加藤 三重子	志賀直哉「国語問題」の政治学
吉田 志穂	欲望の構図 —『少将滋幹の母』論—
海老海 求美	『砂の女』のディスクール
岡 真紀子	俊頼髓脳所収和歌本文礼記
高木 信	兵藤裕己著『平家物語—<語り>のテキスト』
藤森 清	石原千秋著『反転する漱石』
<b>【第14号】</b>	<b>1998年3月 発行</b>
岡 真紀子	俊頼髓脳における古今集の享受 —七叟の歌から尚齒会和歌へ—
本間 正幸	再版本の<<キズ>>跡 —『別座鋪』版元不明本をめぐる—
鈴木 章弘	正岡子規「小園の記」の思想圏 —「写生」という問題—
生方 智子	「新しい男」の身体 —『それから』の可能性—
甲田 晶子	大正期の谷崎潤一郎 —『痴人の愛』に至るまで—
斉藤 順司	エディプスの政治学 —中上健次『岬』論—
石原 久美子	セクシュアリティの病 —『人間失格』論
<b>【第13号】</b>	<b>1997年3月 発行</b>
兵藤 裕己	オーラル・ナラティブの近代
妹尾 昌典	『千載佳句』の資料的価値について

三浦 幸子	光源氏と朱雀院 —斎宮女御入内をめぐって—
大木 正義	彗星の詩学 —『門』論—
渡辺 千恵子	「富嶽百景」背景考 —「桜」から「月見草」への変奏—
阿部 高裕	読まれる女の修辞学 —『或る女』論
西村 謙一	開かれた「山」 —新田次郎『強力伝』論
加藤 洋介	上野英二著『源氏物語序説』
<b>【第12号】</b>	<b>1996年3月 発行</b>
伊藤 博之	西行の恋の歌
辰巳 正明	恋歌 —古今集の文学景観論—
西村 準吉	徒然草序の説
松尾 勝郎	庵崎考
本間 正幸	≪ <sup>シグ</sup> 霽≫考 —レトリックとしての用字—
日高 佳紀	方法としての<大衆> —谷崎潤一郎・『乱菊物語』の構想—
和田 潔	漢語の形成についての一考察 —「じょうだん」考—
堀野 理香	本居大平『萬葉集會評録』について
石原 千秋	小森陽一著『漱石を読みなおす』
山田 俊雄	かめいたかし著『ことばの森』のものがたり
<b>【第11号】</b>	<b>1995年3月 発行</b>
山田 俊雄	ある擬製漢字についての所感 —「裱」と「社杯」と—
妹尾 昌典	道真の詩における若干の表現について
三浦 幸子	紫の上と明石の上 —若紫巻における明石の挿話をめぐって—
岡 真紀子	平安朝における王昭君説話の展開
中野 真麻理	鳥山の疲労侍 —『一乗拾玉抄』から—
市村 栄理	黙齋二世青娥の伴死と没年
河崎 典子	井伏鱒二『遥拝隊長』論 —「言葉」の戦争—
<b>【第10号】</b>	<b>1994年3月 発行</b>
小林 千草	中華若木詩抄と評語「アリアリト」
松本 宏司	催馬楽「浅緑」考
堀野 理香	『萬葉集略解』の宣長説
加田 謙一郎	『冠彌左衛門』の人物造型と観音信仰について
山下 寿美子	詩僧嵩俊海とその師大沼枕山
<b>【第09号】</b>	<b>1993年3月 発行</b>
拳 湖	バサラの語源のために
磯部 祥子	萬葉集における狩の歌 —巻二・一九一番歌をめぐって—
妹尾 昌典	『千載佳句』出典攷正
中野 真麻理	『熊野の本地』私注
影山 恒男	福永武彦『忘却の河』の構造と意味についての試論 —記憶と罪の意識と始まりの位相—
<b>【第08号】</b>	<b>1992年3月 発行</b>
朽尾 武	『玉造小町子壮衰書』拾穂の記
小倉 脩三	「薤露行」(下) —その材源をめぐって—

東 茂美	輪廻する<憶良> -「沈痾自哀文」論-
小林 真由美	『日本靈異記』中巻第七縁考
王 浩智	切断する言葉 -「清心庵」の言語トポス-
中西 美弥子	手枕と源氏物語
<b>【第07号】</b>	<b>1991年3月 発行</b>
伊藤 博之	心の自覚の深化と中世文学
妹尾 昌典	『千載佳句』の校勘
中野 真麻理	『一乗拾玉抄』と氷上山興隆寺
近藤 典彦	石川啄木の借金の論理
王 浩智	<崖下>の系譜 -明治・大正小説における『都会の憂鬱』の位置-
大津 知佐子	たわむれる言の葉 -『或る女』の手紙-
山田 貞雄	「観面」について
日高 佳紀	非在の身体／「雪子」という記号
松尾 勝郎	尾形侂著『俳句の周辺』
<b>【第06号】</b>	<b>1990年3月 発行</b>
尾形 侂	秋津が声
小林 高子	春日蔵人老「述懐詩」について
大矢 恭子	源氏物語の軌跡 -女君の定位と造型をめぐる-
宮脇 真彦	昌啄時代の連歌論「山彦」小考
上野 靖	蕪村評語考 -「しほからし」と「眼前致景」-
鎮目 稔	近世庶民と演能 -「河内屋可正旧記」をめぐる-
牧野 宏子	抱一の光琳乾山顯彰資料
本間 正幸	「東海道四谷怪談」私見
安田 吉人	享保江戸俳壇と団十郎 -「父の恩」を中心に
山田 直己	この一篇
<b>【第05号】</b>	<b>1989年3月 発行</b>
山田 俊雄	「闇から牛」 -漢字とその訓についての話-
佐竹 真由美	元興寺之僧自嘆歌一首
松本 宏司	『梁塵秘抄口伝集』と『俊頼髓脳』
本間 正幸	初期蕉門撰集における構成意識 -『俳諧次韻』『冬の日』を中心に-
本間 也寸志	足穂ノート -中期小説の問題
外岡 浩	漂泊のエクリチュール -『草枕』論
大木 正義	灼熱する針の説話 -『道草』論-
清水 章雄	<思い出の書>
小森 陽一	今井信雄著『この道を往く 漂泊の教師 赤羽王郎』
<b>【第04号】</b>	<b>1988年3月 発行</b>
かめい たかし	ゾータン(雑談)・<<かなのためのかな>>としての“かな”
東 茂美	<朝戸出>の君 -大伴坂上郎女歌585について
安田 吉人	不角前句付考
大津 知佐子	波動する刹那 -『草枕』論
坂本 浩	高田君の代表的著述
<b>【第03号】</b>	<b>1987年3月 発行</b>

佐竹 昭広	大坂に後世願ひ屋 -『本朝二十不孝』私見
西島 恵美子	人妻ゆゑにわれ恋ひめやも
牧野 宏子	酒井抱一と水戸徳川家 -抱一晩年の一資料
鈴木 あゆみ	石川淳・あふれ出す言葉の力
王 理恵	『行人』論 -共振する沈黙への旅立ち
小森 陽一	<論争を読む／書く> -こころの行方
<b>【第02号】</b>	<b>1986年3月 発行</b>
伊藤 博之	伝承の変容とその論理 -『平家物語』にみる燕丹説話をめぐって
野田 浩子	従軍歌の構造 -<清なる自然> 試論1
工藤 晃子	気韻と触れ合う言葉／共棲の場 -梶井基次郎の初期作品をめぐって
湯浅 篤志	「短い長篇」の方法 -高橋和巳『散華』論
敷地 博	不言思本忠臣蔵 -丸谷才一『忠臣蔵とは何か』をめぐって
村上 左千子	現代に甦る近松 -近代演劇史における近松の役割
末内 紀子	誓歌の比喻 -かまくらのみこしのさきのいはくえの
大川 公一	<シンポジウムを終えて> 「善悪の彼岸過迄」としての「こゝろ」
<b>【第01号】</b>	<b>1985年3月 発行</b>
尾形 仵	芭蕉の“わび”とその成立
辰巳 正明	天平の歌学び -直訳体短歌の方法
渡辺 千恵子	『うたかたの記』論 -「ロオレライ」の構図をめぐって
石原 千秋	「こゝろ」のオイディプス -反転する語り
小森 陽一	「こころ」を生成する「心臓」
滝沢 美和子	梶井基次郎における音楽性 -自意識の表出と聴覚的リズム
木村 千恵子	憶良の瓜と栗
山田 貞雄	<この一篇>
西 譲二	